

# 断章 旭川のアイヌ語 地名研究

3

る。しかし、支流名が書かれていない。その支流の水源方向に、シベナイがある。松浦武四郎の記録にも、シベナイとあり、現在の東神楽町の志比内川である。そうすると、この支流は、現在の東神楽町を流れる現称・ポン川である。松浦武四郎は、この川をフシコチユクベツと記録、すなわち、フシコ・チユク・ペツ (husko-cuk-pet 古ペツ) い・秋・川→古い・忠別川



一間宮林藏図の忠別川

松浦武四郎の記録でも、間宮林蔵は、文化七年に愛別町の石垣山の麓まで来たと書き、野帳には、案内人も記載している。写真の間宮林蔵作成の地図（以下、間宮図と略称）は、秋葉實氏の研究で、文化十四年（一八一七年）に作成されたものといいう。写真の地図は、間宮林蔵の直筆ではなく、その写しで、写図と言わられる地図であるが、忠別川を描いた最古の地図である。松浦は、この地図が作成された頃は、上川にはアイヌの人たちが、「凡おもた千余人も有しと聞り」と書いている。

地図上の■印は「番屋」、●印は、朱色で、「コタン（集落）」を表して

いる。忠別川は、「チユクベツ川」である。地質時代の極く最近に、忠別川はこのボン川の流路を流れているという(『旭川市史』)。その旧幕府天文方の表記法で朱色で表記。この「川」の表記が間宮林藏の作図である根拠の一つでもある。さて、前号で間宮図に交易のための番屋が、忠別川に二カ所あると紹介した。その番屋(■印)が、忠別川の左岸支流に、二カ所記載されており、松浦武四郎が安政四年(一八五七)の記録がある。

八五七年）に訪ねた時は、イソテク夫妻の一軒のみであったが、「昔は多く有りし由なり。今は只一軒也」と書いている。余談になるが、松浦の忠別川のことから上流の記事と、美瑛川・辺別川の記事は、全て聞き書きで、野帳によると、実際にはここまでしか踏査していない。

る。しかし、支流名が書かれていない。その支流の水源方向に、シベナイがある。松浦武四郎の記録にも、シベナイトがあり、現在の東神楽町の志比内川である。そうすると、この支流は、現在の東神

ツ川」である。地質時代の極く最近に、忠別川はこのボン川の流路を流れていたという(『旭川市史』)。その旧川口は、緑東大橋たもとの旭川市旭神町で、こじと上流の東神楽町にある。番屋とコタンの印が記載されている。旭神町のコタンは明治時代まで存続し、明治二十年代で七戸二十人との記録がある。

八五七年)に訪ねた時は、イソテク夫妻の一軒のみであったが、「昔は多く有りし由なり。今は只一軒也」と書いている。余談になるが、松浦の忠別川のこから上流の記事と美瑛川・辺別川の記事は、全て聞き書きで、野帳によると、実際にはじこまでしか踏査していない。

忠別川は鮭の豊漁川で、このようにコタンや番屋があったことと、間宮図の美瑛川の●印の三つのコタンについても、次号で触れたい。